
雨

きなこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨

【Nコード】

N9111L

【作者名】

きなこ

【あらすじ】

久しぶりに会った同級生

大雨だ。こんなに降るんだったら折り畳み傘じゃなくて、もっと大きな普通の傘を持ってくればよかった。

ちえ、と心の中で軽く舌打ちをしながら、横断歩道の青信号が点滅するのを眺める。

低い場所を求めて流れていく水が、足元を流れていった。

「あ、さくらじゃん。」

不意に聞こえた声に、思わず持っていた買い物袋を取り落とす。

”バチャン”

見事に水溜りの中に落っこちた。

「あーあ。」

私は情けない声を出して、買い物袋の酷い有様を睨んだ。続けて声をかけてきた男のほうも睨んだ。

「わあ怖い。そんな顔で睨まんといてくださいよ。俺のせいかな？それ俺のせいかな？？」

よく見れば、男は森永だった。

「なんだ、ミルクチョコレートか。」

私のまともな第一声に、彼はまるでアカスジキンカメムシだーと言われたときのような顔をしていた。

ちなみにアカスジキンカメムシは、大型のカメムシだ。そして更に言うと、私が彼につけた最初のニックネームだ。

「なんだ、不満か？チョコレートは嫌いかな？」

アカスジキンカメムシよりは可愛らしいニックネームだと思ったんだけどな。

「いや、不満とか、そうゆーのじゃなくて、なんて言うか、……」

「なんだよ、ハッキリしろよ。」

「不満です。」

あまりに彼がハッキリ答えたので、私はちょっと不機嫌になって、もう既にビチヨビチヨになった買い物袋を拾って、彼に背を向けた。

「え、まじっすか。そこで黙るんですか。ごめんなさい、不満じゃ無いです。ナントカカメムシよりは好きです。」

「……アカスジキンカメムシも素敵よ。」

「あ、はい、アカジングスカンカメムシも好きです。」

「……………でもいいよそんなの。」

「（え！！）」

やっぱり傘は小さすぎた。雨粒は傘を伝わって私の服に染み込んでいく。

なかなか変わらない信号に苛々して、私はカメモシ（じゃなかった森永）の方を振り返った。

「ねえ、信号が変わらないよ。」

彼はさっきと同じ位置に立っていた。でもさっきまでさしていた紺色の傘を、今はたたくで手に持っている。

「ああ、そう。」

雨の音に消されてしまいそうな小さな声で、彼は返事をした。やる気も元気も覇気も無い。さっきまでの、ヘラリとした笑顔もない。

買い物袋に入っている2リットルペットボトルで殴ってやろうかと思っただけ、やめた。森永が泣きそうに見えたから。

「アカスジキンカメモシはあんまり臭くないんだよ。カメモシだけだ。」

私の脳内では”慰めの言葉”というのが登録されていなくて、だからつい変なことを口走った。

森永はちよつと吃驚した顔をして、ちよつと笑った。

「そおか。」

ヘラリ、と笑った。

思えば私はこの笑い方がいつも気に食わなかった。全部諦めたみたいな、それでいてまだ未練があるような、寂しげな笑い方。

「ばーか。」

なんとも言えない気分になって、私は暴言を吐いて、また信号の方へ向き直った。

赤いままの歩行者信号を眺めながら、彼にもいろいろあるんだろうなあと考えた。ヘラリと笑うカメモシ（ではなく森永）にも、いろいろと。

私は、いつも笑っていて皆からの信用もあつて面白い彼に憧れてはいたけれど、なりたいたとは思わなかった。

むしろ頼まれたって願ひ下げだ。それに、私は私のポジションに満足している。

「ミルクチョコレートのポジションは嫌だな。」

小さく呟いたつもりだったのに、彼にはちゃんと聞こえたらしい。「そうだね。」と寂しげな声が後ろから流れてきた。

雨水みたいに。

私はまた何か言いたくなっただけで、できなかった。

OLのお姉さんが歩行者用のボタンを押したから。そのとき初めてこの信号はボタンを押さないと変わらないことに気づいた。

「……………知ってた？」

一応聞いてみる。我ながら間抜けな声だと思う。

「……………知ってたら押してる。」

森永も間抜けな声だった。

2人で笑いながら横断歩道を渡った。OLのお姉さんが変な顔をしてこっちを見てるけど気にならない。

「カメモシのポジション、森永ならいけると思うよ。」

私の脳内には”励ましの言葉”もインプットされていないから、私はまた変なことを口走った。

でも彼はちゃんとヘラリと笑ってくれた。

「そおか。」

雨が止みはじめた、気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n91111/>

雨

2010年10月14日18時33分発行